

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 9 日現在

機関番号：23902

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520143

研究課題名（和文） 歌う男たち——英独仏と日本におけるアマチュア合唱運動の音楽社会史研究

研究課題名（英文） The Singing Men : A Study on the Socio-Musical History of Amateur Choir Activity in England, Germany, France and Japan

研究代表者

井上 さつき（INOUE SATSUKI）

愛知県立芸術大学・音楽学部・教授

研究者番号：10184251

研究成果の概要（和文）：

毎年、私たちは研究の方向性を検討するために、数回の打ち合わせを行った。また、ヨーロッパと日本で数回現地調査を行った。2010年にはドイツ南西部、2011年には中部（旧東ドイツ）を共同で調査し、さまざまな資料を収集することができた。私たちはいくつかのシンポジウムや学会で研究発表し、また研究誌や書籍の形で成果を発表した。ヨーロッパと日本の合唱運動のいくつかの事例研究を通じて、この分野の基礎研究を行った。

研究成果の概要（英文）：

Each year, we hold meetings to discuss the basic line of our research. Together, we have collected various research materials and made several field investigations in southwestern Germany in 2010 and middle Germany (former East Germany) in 2011. We have presented papers at symposiums and meetings and published the results of our research in several bulletins and a book. Through a number of case studies of amateur choir activity in Europe and Japan, we have carried out basic research in this area.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：音楽学・アマチュア合唱運動

1. 研究開始当初の背景

19世紀にヨーロッパ各地でさかんに行われた合唱祭や合唱コンクールに代表される

「参加型」イベントは、人々の共同体意識をより大きなヒエラルキー構造の中に組み込み、「国民」意識に結び付けてゆく有効な場

となった。合唱運動は国ごとに相違はあるものの、国際的な交流も広く行われ、草の根文化交流的な意義をも担っていた。戦前日本の合唱運動は、このようなヨーロッパの例にならった「音楽の市民社会化」のひとつとして始まった。

ところが、従来の音楽史の研究者は芸術音楽にのみ目が向き、アマチュアの音楽活動に対しては着目してこなかった。合唱運動についても正面から扱った研究はほとんど行われてこなかった。この研究はその間隙を埋めるものとして構想された。

2. 研究の目的

本研究は、英独仏における合唱運動の隆盛と日本におけるその受容を問題にするもので、これまで音楽史の文脈ではほとんど語られてこなかったアマチュア合唱の実態とその社会的組織化の過程に注目し、音楽と社会とのダイナミックな関係を比較史的に考察することを目的にした。

3. 研究の方法

(1) 年に数回打ち合わせを行い、最新の研究動向について理解を深め、研究の方向性を検討する。

(2) ヨーロッパおよび日本での調査を行う。特に、ドイツについては共同で調査を行う。

(3) 関係する諸学会、諸研究会との交流を積極的にすすめることとし、実施した。

4. 研究成果

2010年度は基礎調査を中心に行った。まず、7月に東京で打ち合わせを行い、先行研究をまとめると同時に、この問題について申請者がこれまで予備的に行ってきた研究を整理し、今後の考察の基礎となる視点を確保した。

国外の調査としては、9月17日から21日まで、松本彰と井上さつきの両名で、ドイツ南西部のフォイヒトヴァンゲンの合唱博物館・資料館、およびシュトゥットガルト近郊のジルヒャー博物館を訪れ、調査を行った。これらはいずれも男声合唱運動研究の中心となっている博物館で、展示も充実しており、研究スタッフの案内で、当時の協会運動の詳細を知ることができた。その後、井上は、パリの国立図書館で、合唱運動に関する文献を収集した。さらに、11月17日には、名古屋の愛知芸術文化センターで開催された日本音楽学会の全国大会において、松本はシンポジウム「音楽・国民国家・コメモレーション」のコーディネーターを務め、松本、井上、共に発表を行った。

以上の調査・研究にもとづき、井上は「フランス人が見たドイツ合唱同盟祭」について、松本は「音楽におけるコメモレーション」について、それぞれ音楽学研究誌および学会誌に論文を掲載した。

2011年度は事例研究を中心に行った。まず、6月25日、日本ドイツ学会のシンポジウム「音楽の国ドイツ？」において、松本は基調報告、井上はコメンテーターを務めた。男声合唱運動は当時の社会運動の中でも重要な意味をもつものであり、シンポジウムの内容と密接に関係していた。

国外の調査としては、9月に井上と松本はヨーロッパに赴き、それぞれ調査を進めたが、その期間内の9月14日から18日まで、共同でドイツの調査を実施した。具体的には、ドレスデン、フライベルク、マルクノイキルヒェン、ハレ、ライプツィヒを訪れ、文書館や楽器博物館などを調査・見学した。ドレスデンでは1865年の第1回同盟祭に関連する場所を調査し、市文書館において、この合唱祭等に関する一次資料を収集することができ

た。マルクノイキルヒェン楽器博物館は、楽器製作の歴史と深く関係したところで、その点について館長と懇談することができ、ドイツ市民の音楽史を考察する上で、多くの示唆を得た。その後、井上はパリの国立図書館やギメ美術館図書室で、合唱運動に関する文献を収集した。一方、松本はライプツィヒなどで資料の収集を行なった。

松本は12月10日、早稲田大学西洋史研究会において、「19世紀ドイツにおける市民社会、国民国家、戦争——協会運動と三重のナショナリズム」を発表し、そのなかで男声合唱協会の重要性について論じた。井上は日本における合唱運動についての事例研究に着手し、日本に合唱コンクールを根付かせた小松耕輔について調査を開始した。

2012年度は研究のまとめの年であり、数回の研究会を東京で行った。井上は政治経済学・経済史学会秋季学術大会の「音楽が国境を越えるとき」というパネル・ディスカッションに参加し、万博と音楽との関係について発表した。万博は民衆の合唱活動と深く関係していた。また、日本における合唱コンクール導入期について、紀要論文「小松耕輔と第1回合唱競演大音楽祭（1927）」にまとめた。論文では、小松耕輔が1927年に開催し、戦前日本の合唱運動を発展させる上で重要な節目となった第1回合唱競演大音楽祭について、上野学園大学所蔵の「小松文庫」および、日本合唱連盟図書館に所蔵されている資料等を使用しながら、当時の社会的コンテクストに置き直し、その意味を再考した。その後、フランス第二帝政と民衆層のアマチュア合唱運動について、歴史の見直しと再検討をすすめている。

松本は、長年の研究を『記念碑に刻まれたドイツ—戦争、革命、統一』（東大出版会）にまとめた。ドイツの男声合唱運動は、協会

運動として、祭典、記念碑と深く関係して発展したのであって、19世紀初頭以来の200年のドイツの記念碑をまとめた本書は、男声合唱運動を研究する上で必要な基礎作業だった。とくにドイツにおける「国民」概念の重層性については、早稲田大学西洋史研究会での報告を活字にした。本書の冒頭に現在のドイツ国歌の元になった「ドイツ人の歌」について紹介したが、その後、「国歌、国民歌に歌われたドイツ」の研究に着手した。これまでほとんど取り上げられてこなかったプロイセン国歌、オーストリア国歌、ブラームス、ヴァーグナー、ヨハン・シュトラウスなどの当時のドイツを歌ったさまざまな歌を分析しながら、ドイツ統一問題の錯綜した歴史の再検討をすすめている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計8件）

- ① 井上さつき、2012「小松耕輔と第1回合唱競演大音楽祭（1927）」『愛知県立芸術大学紀要』42、査読無、105-117.
- ② 井上さつき、2012「『音楽の国ドイツ？』に対するコメント」『ドイツ研究』46、査読無、65-69.
- ③ 井上さつき、2011「フランス人が見たドイツ合唱同盟祭（1865年）」『音楽学論文集（愛知県立芸術大学音楽学コース）』査読無、7-21.
- ④ 松本 彰、2013「『協会運動と記念碑—ドイツにおける三重の国民概念』『西洋史論叢』34、査読無、11-17.
- ⑤ 松本 彰、2012「『音楽の国ドイツ』の成立と崩壊」、『ドイツ研究』46、査読無、6-18.
- ⑥ 松本 彰、2009、「ドイツ記念碑論争」『ドイツ研究』43、査読無、4-18.
- ⑦ 松本 彰、2009「音楽におけるコメモレーション」『19世紀学研究』5、査読無、123-124.
- ⑧ 松本 彰／井上さつき、2009「音楽におけるコメモレーション」『音楽学』52、査読無、152-153.

〔学会発表〕（計6件）

- ① 井上さつき、2012「音楽の展示—パリ万博と音楽—」(パネリスト) 政治経済学・経済史学会秋季学術大会、11月10日、慶應義塾大学。
- ② 井上さつき、2011「シンポジウム「音楽の国ドイツ?」に対するコメント、日本ドイツ学会、6月25日、朱鷺メッセ。
- ③ 井上さつき、2010「音楽とメモレーション—19世紀フランスの場合」日本音楽学会、11月7日、愛知芸術文化センター。
- ④ 松本 彰、2013「戦争と国民国家—19世紀と20世紀、ヨーロッパとアジア」19世紀学会、3月18日、新潟大学。
- ⑤ 松本 彰、2013「国歌、国民歌に歌われたドイツ」WINC(Workshop in Critical Theory)、3月24日、東京外国語大学。
- ⑥ 松本 彰、2010「音楽・国民国家・メモレーション」日本音楽学会、11月7日、愛知芸術文化センター。

〔図書〕(計1件)

- ① 松本 彰、2013「記念碑に刻まれたドイツ」東京大学出版会、368ページ

6. 研究組織

(1) 研究代表者

井上さつき (INOUE SATSUKI)
愛知県立芸術大学・音楽学部・教授
研究者番号：10184251

(2) 研究分担者

松本 彰 (MATSUMOTO AKIRA)
新潟大学・人文社会・教育科学系・教授
研究者番号：50165875